



出口 治明氏



No.345 令和元年5月15日発行  
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光  
編集人 事務局・矢嶋まゆ子  
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二  
明治大学「紫紺館」内  
電話 (〇三) 三二九六一四七四七  
印刷 有限会社 美 創

### 連合駿台会三月例会

「これからの日本を考える」

立命館太平洋大学 学長 出口 治明氏

連合駿台会の平成最後(三十一年)となる例会を、三月二十日(水)十七時四十五分より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、出口治明氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

年度末のお忙しい中、お集まりいただき感謝する。今回は平成最後の例会となり、昭和・平成・そして新しい元号の時代を生き抜いていくことになる皆様には、いろいろ感慨深いものもあるかと思う。

まず、わが明治大学は二〇二一年には創立一四〇周年を迎えるため、昨年十一月六日に実行委員会が立ち上がり、記念式典は十一月

一日と決定した。それまでに四つの分科会(記念式典祝賀会分科会・教育記念事業分科会・スポーツ記念事業分科会・広報戦略分科会)に分かれて、記念事業の詳細を詰めていくことになる。当会からは、私と当山専務理事をはじめ複数の方が参画することになった。

また連合駿台会のバッジ制作を、当会の常任理事で日展の理事でもある山田朝彦氏にお願いしてあったが、完成したのでここにご披露したいと思う。デザインは五大陸・五弁の花を表現しており、明治大学連合駿台会の頭文字「MRS」が、銀の台座に金の象嵌で描かれている。来る五月十七日の通常総会当日に、全会員に無償でお配りする予定である。

最後に今年に入ってから嬉しいニュースを三つお話ししたい。一つ目は一月十二日、明治大学ラグビー部が二十二年ぶり十三回目の日本一に輝いた。待ちに待ったという感激であったことは記憶に新しいだろう。二つ目は一般入試志願者数が十一万二千名弱と、昨年よりはやや減ったものの三年連続十万人以上をキープした。さらに十三年連続十万人以上という記録も続いており、少子化が進む中、明治大学は高校生に人気のある大学としての地位を確固としていることは喜ばしい。三つ目は、明治大学顧問であり、元理事長・元当会会長の長堀守弘氏が、フランス政府の芸術文化勲章シュヴァリエ章(騎士)を受章

された。大変名誉なことであり、後ほど記念品を贈呈して、皆様方と一緒に祝いしたいと思っている。

本日の講演は、大変お忙しい中、大分県別府から立命館アジア太平洋大学の出口学長にお出でいただいた。有意義で素晴らしいお話が伺えるものと、楽しみにしている。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

### 「タテ・ヨコ・算数」で考える

生きること、働くことは言い換えれば「周囲の世界を経営する」ということだ。この世の中をどのようなものと理解して、自分が目指したい世界は、今の世の中のうまいってない部分のどこを変えたいと思いい、自分はその中でどの部分を担うのか……、これを決める必要がある。

そのために必要なことは、世の中を素直に見ること。森の姿を素直に見ることができなければ、一本の木すら植えることができない。人間は自分が見たいものしか見ないし、あるいは見たいように現実を変換してみる動物（脳の機能）であり、記憶ですら都合の良いように変換する。このことをよく理解しておく必要があるだろう。

安倍総理をどう思うか？ と問えば、よく頑張っているという人もいれば、もう代わったほうがいいという人もいます。安倍さんは一

人なのに、どうして見方は様々なのだろうか。

それは、我々が色眼鏡、つまり価値観や人生観で安倍さんを見ているからである。つまり人間は、見たいものしか見ない、これは人間の脳の癖なのでしょうがない。だからそれを理解した上で、世界をフラットに見ようとすれば、方法論が必要だということになる。

社会をきちんとはと見るための方法論には、「タテ・ヨコ・算数」の三通りある。タテは

「昔の人がどう考えていたのか」、これは人間の脳みそは一万年進化しておらず、いまだに変わらないからだ。ヨコは「世界の人がどう考えているのか」で、タテ・ヨコで見れば、たいていのことがわかる。

たとえば、私は中学校で源頼朝は北条政子と結婚して鎌倉幕府を開いたと習った。これを素直に考えたら、日本は夫婦別姓の国である。さらに世界に目を向けると、OECD加盟三十六カ国の先進国の中で、法律婚の中で夫婦同性を条件にしている国は、皆無なのだ。こういうタテ・ヨコのファクトがわかれば、夫婦別姓はおかしいことではないことも理解できる。つまりどんなことにも、タテ・ヨコはものすごく大事なわけだ。

三つめの算数とは、つまりデータ。エピソード（物語）ではなくて、エビデンス（証左）で見なくてはならない。たとえば、ここ数十年間の日本とヨーロッパを比較すると、

ヨーロッパでは年間労働時間が千五百時間未満でも二割の経済成長、一方日本では正社員が二千時間働いても半分の一割しか成長していない……、つまりこのエビデンスとエピソードを結びつけてわかることは、日本人はいい仕事をしているにもかかわらず、マネタイズできていない、生産性が上げられない。ということはマネジメントがおかしいのではないか？ という話になる。

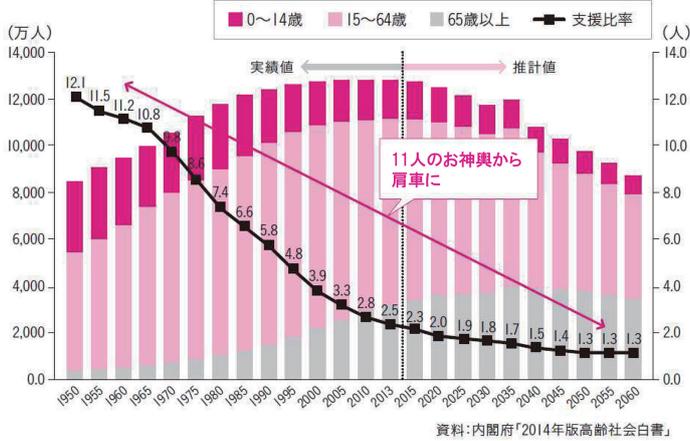
私は日本が大好きだし、世界中を旅してみても、日本ほどいい国はないと思う。強欲な欧米の資本主義に比べて、日本の経営は優れているという人も山ほどいるが、では長時間働いても成果が出ないことを、どう説明するのだろうか。解はマネジメントが間違っているとした言い方がないのだ。

### 「定年の廃止」は一石五鳥の政策

日本は異常なまでに少子高齢化が進んでいて、若い方々に話を聞くと、「未来は結構暗い」と言う人が多いのが現状である。その根拠は極めて簡単で、昔は、若者十人以上で高齢者一人の面倒をみる「お神輿」だったが、将来は、「肩車」になるのではないか、そんなのはイヤだという考えがベースにある。この考えを「Young supporting Old」と呼び、若者が高齢者の面倒をみるのは当たり前というところに立脚しているが、これは本当に正しいのだろうか？

## 異常な少子高齢化

日本の支援比率の推移と将来予測



人間以外の動物で、若者が高齢者の面倒をみる例なんてない。そんな動物はいないというところは、これが不自然だということはずぐわかる。少子高齢化が先に進んだヨーロッパでは、この考え方は二十年前にすでに消えて去って、「All supporting All」に変わっている。「年齢なんか考えずに、みんなで社会を支え、困った人に給付をしよう」という考えに行き着いている。若者が高齢者を支えるのだったら、働ける若者から所得税を取って、住民票で年齢をチェックして配布すれば済む。しかし「All supporting All」で、みんな

で社会を支えようと思ったら、消費税を増やす以外に方法はないし、シングルマザーや困った人に給付を集中しようと思ったら、マインバーを整備するしかない。「少子高齢化」とは、所得税と住民票で社会が回っていたレベルから、消費税とマインバーが社会のインフラにならないと回らないパラダイムシフトのことだと理解すればいい。

しかも、日本は世界で一番高齢化が進んでおり、あと五年もすれば団塊の世代が後期高齢者になって、介護がしんどいと言う人たちも少なくない。「介護」を定義すると、それは平均寿命から健康寿命を引いたものということになる。ということは、介護を減らそうと思ったら、健康寿命を伸ばすしかない。ではどうやったら健康寿命を伸ばせるのだろうか？ 医者五十人ぐらいに聞いてみたところ、珍しく意見が一致して、全員が「働いた方がいい」と言った。

つまりいま社会がやるべきチャレンジは、「定年の廃止」しかない。これは一石五鳥の政策なのである。

第一に、健康になる。ちなみに寝たきり老人がいるのは日本だけだ。

第二に、医療や年金の財政はもらうほうから払う方になるので、ダブルで良くなる。

第三に、年功序列が消える。定年を止めて年功序列を続けたら会社はすぐに潰れるか

ら、同一労働同一賃金制にならざるを得ないので、若い人にもチャンスが広がる。

第四に、中高年のやる気が出る。人生百年と言うのに、五十歳でそろそろ……、なんてもったいなくないと思わないか？ 何でこんな当たり前のことができないのかといえば、「定年」という社会常識が邪魔しているからにはかならない。

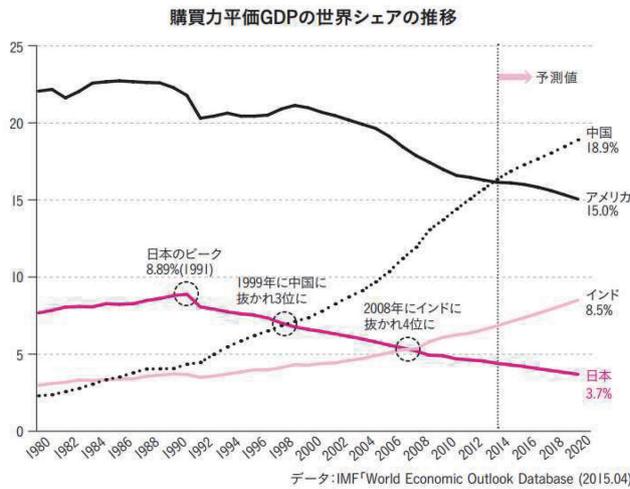
第五に、日本の状況に合っている。団塊世代二百万人の労働人口が消えるのに対し、新社会人は百万人。これからの日本はものすごく労働力不足になるが、高齢者が働くことで新しく労働力を供給することができる。

### ユニコーン企業が育たない日本の土壌

少子化も大問題だ。歴史的に見ても、人口が減って栄えた国や地域はない。政府の方針すべてが正しいとは思わないが、「人口一億人、出生率一・八人」を確保したいというのは間違っていないと思う。では何故、出生率が一・四人しかならないのだろうか？ 理由はいろいろ考えられるが、根本には根強い男女差別があり、家事・育児・介護は当然女性のものだという思い込みが、出生率低下の最大の原因だと思う。

ありとあらゆるデータで比べても、日本は先進国で一番男女差別が激しい国だ。いまはまず、全分野で先進国の「クォーター制」(女性の役員が四割ないと上場を取り消す

## 異常な財政赤字



等といった男女平等規定)などを行って、女性の地位を引き上げることが最優先させなくてはならない。自国の男女差別さえなくせない国や社会が、外国人を受け入れて共生できるはずがない。さらに赤ちゃんを産みやすい国を作らなければ社会は伸びない。

平成の三十年間をデータでみると、GDPは九%から四%に半減、競争力は一位から二十五、六位まで落ちた。平成元年の世界のトップ企業二十社は、実はNTTが一位で、十四社が日本企業だった。バブルの前、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代。では今

はどうなっているかというところ、トップ二十社の中に日本企業は一本も入っていない。世界の観光地から、日本語のパンフレットが消えたのも無理ないことなのだ。デフレ、金融機能の喪失等、いろいろな原因が挙げられているが、一番わかりやすい解は、日本企業を押しつけて、どんな企業が世界のトップ20になったということを見ることだろう。

それは言うまでもなく、GAF A (ガーフア) およびその予備軍とされるユニコーン企業である。ユニコーンは額に一本の角が生えた伝説の生き物であり、ユニコーン企業は、ベンチャーキャピタルを始めとする投資家から、ユニコーンのようにまれで、巨額の利益をもたらす可能性のある企業として注目されている。ユニコーンがいるのは、シリコンバレーを中心にアメリカに百五十匹くらい、日経新聞によれば、中国に七十四匹、インドに十七匹、フィナンシャルタイムズによれば、EUにも三十一匹いるが、日本はゼロ、この現状がすべてだろう。GAF Aやユニコーン企業はとも若く、フェイスブックは中学三年生、グーグルも成人式を迎えたばかりだが、わずか十五年ほどで、トヨタ自動車の二倍の時価総額を持つ巨大企業に成長しているのだ。

日本の低迷はユニコーンのような新しい産業を生み出せないこと、戦後の成功体験にか

まけて、いまだに製造業、モノづくりとか言っている日本の土壌がすべての敗因である。製造業は日本の宝であり、優れているのは認めるが、製造業が占めるウエイトはGDPの二割を切るうとしており、雇用者数にいたっては一千万人を割り込んで、全労働人口の一七%くらいしかない。二割を切るような産業で、国を引っ張れるはずがないから、製造業を大事にしながらも、新しい産業を創出していかなくてはならないのである。

製造業に適した人材というのは全世界で共通していて、素直で、我慢強く、偏差値がそこそこ高く、協調性がある、上司の言うことをよく聞く人。使いやすなのは事実だが、こんな人たちを集めて新しいものを作れるのか? という甚だ疑問である。GAF Aやユニコーン企業を生み出したのは、スティーブ・ジョブズらに代表される、世界中から集まったオタク連中で、好きなことを徹底的に極め、ほとんどは大学院卒の個性強い人たちである。彼らが集まって、ワイワイガヤガヤ言い合った中で、新しいアイデアが生まれ、ユニコーン企業が誕生した。

私は高校を二つに分けることを提唱している。国立・私立とか、理系・文系とかいう區別は意味がないので、七割ぐらいは偏差値コースでいいから、残り三割は好きなことを徹底的に極めるような「オタク人材」を育て

ればいいと思っている。とがった個性を大事に育む教育を行わなければ、決してジョブズは生まれないと……。

世界は野球からサッカーへ

製造業を野球、ユニコーン企業をサッカーに例えるなら、世界はとくに野球からサッカーに移行しているのに、日本は相変わらず夜遅くまで素振りをやっている……、これでは勝てるはずがない。これからは個性を大事にし、多様性のある人間を育てなければならぬと思う。

ということとはリーダーのあり方も大きく変わらざるを得ないということになる。製造業の工場モデルで社会を牽引している時は、「黙ってオレについて来い」、戦後の日本はこれでよかったが、これからは、アイデアを出させなければならぬから、お釈迦様の手の上の悟空のように個性の強い部下を放し飼いにし、自由自在にいろいろな所に行かせるくらいの度量がなければ、良い人材は育たないし集まらないだろう。社会が変われば、働き方も変わる、そしてマネジメントも変わるのだ。

世界の風調が野球からサッカーに変わったのだから、野球全盛時代の成功体験をいつたん忘れて、現実を直視して、サイエンスベースで考えてみる、ということだ。そのためには、まず常識(とされてきたことも含め)を

疑わなければならぬと思う。

本日いただいたテーマは「これからの日本を考える」だが、これからの経営を考えるため、そしてもう一度日本を元気にするためには、アイデアが出せるか否かにかかっている。それにはとがった人材、個性豊かな人材を大事にしていくしかないだろう。そのため

【講師略歴】

出口 治明(でぐち・はるあき)

役職名

立命館アジア太平洋大学 学長

学校法人立命館副総長・理事

主な略歴

一九四八年 三重県美杉村(現・津市)生まれ

一九七二年 京都大学法学部(専攻:憲法)を卒業、日本生命保険相互会社に入社、ロンドン現地法人社長、国際業務部長などを歴任

二〇〇五年 東京大学総長室アドバイザー

二〇〇七年 早稲田大学大学院講師

二〇〇八年 ライフネット生命保険株式会社開業、代表取締役社長に就任

二〇一〇年 慶應義塾大学講師

二〇一三年 ライフネット生命保険株式会社代表取締役会長に就任

二〇一七年 ライフネット生命保険株式会社代表取締役会長を退任

二〇一八年一月 立命館アジア太平洋大学学長に就任(現在に至る)

受賞

二〇一七年 第三十三回「企業広報賞」選考委員会特別賞(一般財団法人経済広報センター)

には、リーダーご自身にも、率先して好きなことにチャレンジしていただきたいと願っている。そうすれば、今までの常識とはちょっとかけ離れたような人材も許容できて、知恵を集結することもできるのではないかと思う。そしてそれこそが日本を再生できるので信じている。

【主な著書(単著)】

- 『人類5000年史Ⅱ:紀元元年〜1000年』(ちくま新書・二〇一八年)、『全世界史 上巻』
  - 『全世界史 下巻』(新潮文庫・二〇一八年)、『世界史の10人』(文春文庫・二〇一八年)、『知略を養う 戦争と外交の世界史』(かんき出版・二〇一八年)、『教養が身につく最強の読書』(PHP文庫・二〇一八年)、『0から学ぶ「日本史」講義 古代篇』(文藝春秋・二〇一八年)、『仕事に効く教養としての「世界史」=戦争と宗教と、そして21世紀はどこへ向かうのか?』(祥伝社・二〇一六年)、『働く君に伝えたい「お金」の教養』(ポプラ社・二〇一六年)、『人生を面白くする本物の教養』(幻冬舎新書・二〇一五年)、『世界史の10人』(文藝春秋・二〇一五年)、『仕事に効く教養としての「世界史」』(祥伝社・二〇一四年)、『直球勝負の会社―日本初「ベンチャー生保の起業物語」』(ダイヤモンド社・二〇〇九年)
- その他多数

◆新入会員の紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



宝島 哲央  
昭和三十二年・農学部卒  
(株)ブルボン  
取締役第三製品開発部長  
新潟県柏崎市在住



山本 紳  
昭和三十九年・農学部卒  
山本コーポレーション(株)  
代表取締役社長  
広島県尾道市在住



猪田 忠  
昭和三十七年・商学部卒  
丸紅建材リース(株)・常務取締役  
経理部長、経営管理本部副本部長  
神奈川県横浜市在住



小澤 敏  
昭和六十年・商学部卒  
三井化学(株)・執行役員  
三井化学アグロ(株)・代表取締役社長  
東京都小金井市在住

◆訃報

当会顧問の野口昌宏氏(昭和三十七年・商卒、公認会計士野口昌宏事務所所長)が、平成三十一年四月五日に逝去されました。享年八十歳。  
ご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆明大ニュース

●二〇一九年度入学式

二〇一九年度入学式を四月七日、日本武道館(千代田区)で挙行了。式典は午前・午後の二部制で行われ、鮮やかな桜が咲き誇る中、新入生八千三百八十八人(学部生七千四百五十一人、大学院生九百三十七人)が、明大生としての第一歩を踏み出した。

土屋恵一郎学長は告辞で、人工知能の発達など複雑化する社会において、新しい価値を創造する姿勢の重要性を説き「大学で君たちが学ぶのは大勢に順応するのではなく、既存の固定観念を壊し、新しいフィールドに飛び込んでいくことだ」と強調。さらに、「明治大学は多様な世界への入り口。新しき人、新しきものを大胆に求めて『前へ』と激励した。続いて、祝辞に立った柳谷孝理理事長は、明治大学の創立期や建学の精神を紹介するとともに、「自分で考え抜く力を磨き続け、新たな出会い仲間と切磋琢磨して『個』の確立を

目指してほしい」と期待を込めた。

新入生代表による宣誓では、午前の部は小野竜也さん(理工学部)、午後の部は高橋植さん(政治経済学部)が登壇。新しい「令和」時代の担い手として、「専門性を極めるだけでなく、学際的な研究にも主体的学びの姿勢を持ち続け、世界に雄飛できる力をつけていく」(小野さん)、「学生生活での困難や挫折を悲観的に捉えるのではなく、チャンスとして肯定的に捉え、仲間たちと共に成長していく」(高橋さん)と力強く決意を述べた。

全員による校歌斉唱の後には、新入生歓迎セレモニーが行われ、交響楽団、グリーククラブ、混声合唱団による演奏や、校友で競泳・ロンドンパラリンピック金メダリストの秋山里奈氏からのビデオメッセージが紹介されるなど、新入生たちは大学生活への期待に胸をふくらませた様子だった。

●創立一四〇周年記念事業

実施計画基本方針を決定

記念式典を二〇二一年十一月一日に挙行

明治大学創立一四〇周年記念事業実行委員会(委員長 柳谷孝理理事長)はこのほど、記念事業の実施に向けた基本方針を策定し、記念式典および祝賀会を、本学の創立記念祝日である「二〇二一年十一月一日」に挙行することを決定した。

基本方針では、将来を予測することが困難な時代においても、これまでの伝統を継承しつつ、「明治大学が二十一世紀の活力の中心となるような存在感を示す周年記念事業を実施する」としており、学問・研究、芸術・文化、スポーツの三分野を中心に、学生・校友・父母・教職員が一体となり、アジアの中における明治大学のプレゼンスを高めることを目的に展開していく。

さらに、創立一四〇周年記念事業の柱の一つとして、十年後の創立一五〇周年を見据え、さらなる飛躍を目指す明治大学の確固メッセージとして、新たな長期ビジョンを公表することを計画している。

また、現在計画中である「和泉キャンパス新教育棟（仮称）整備計画」は、創立一四〇周年記念事業として、二〇二二年三月の竣工を目指している。

今後は、創立一四〇周年記念事業実行委員会のもとに設置された各分科会において、本格的に記念事業の検討が進められる。

### ● J Aセレサ川崎と委託研究契約

アスパラガスの「採りつきり栽培」普及を

目的に

明治大学は、農学部の元木悟准教授（野菜園芸学研究室）らが開発した収穫までの期間を大幅に短縮できるアスパラガスの新栽培法

「採りつきり栽培」の普及に関する委託研究契約をセレサ川崎農業協同組合（J Aセレサ川崎）と三月二十八日に締結した。研究期間は、二〇一九年四月一日から二〇二〇年三月三十一日までの一年間。

栽培が難しいアスパラガスは、通常、凍霜害を防ぐために五月頃に苗を植え、本格的に収穫できるのは定植後三年目からである。高い付加価値が期待できる反面、十年以上かけて一つの株で収穫を続けるため、長期間にわたる病害虫防除の管理や他品目との輪作ができないなどの難点があった。

これに対し「採りつきり栽培」は、深植えにより凍霜害対策を施して植え付け時期を二〜三月に早め、約一年後にすべての茎を収穫し、株を翌年に持ち越さない単年度の栽培方法である。従来の栽培法よりも栽培期間が短いため病害も発生しにくく、作業負担やコスト削減のほか同じ畑での輪作も可能となる。

川崎市と本学の連携協定に基づき設置された「黒川地域連携協議会」で二年前から、麻生区の黒川地区で十七軒の農家が試験的に栽培を実施。昨年、直売所で初めて販売され、来店者から好評だったこともあり、アスパラガスの生産農家は五十四軒に増加した。「採りつきり栽培」をより確実に広め、アスパラガスのブランド化と農業所得の増大を目的

に、今回の契約に至った。開発者の元木准教授は、「都市農業を営む生産者のために、J Aセレサ川崎と協力して『採りつきり栽培』の普及に力を注ぎたい」と抱負を述べた。

### ● 語り継ぐ戦争の記憶

#### ―大塚名誉教授と土屋学長が対話講演会

大塚初重名誉教授と土屋恵一郎学長による対話講演会「戦争と学問―明治大学から平和を考える―」が三月三十日、駿河台キャンパス・グローバルホールで開催された。

会は大塚学長や司会の矢島國雄文学部教授からの質問に大塚名誉教授が答える形で進行し、冒頭は大塚名誉教授が東京大空襲や、自身が海兵団に入団後、上海で捕虜になったことなど、自らの戦争体験談を披露した。土屋学長が「戦争の記憶が語り継がれていくことが大事ではないか」と述べると、大塚名誉教授も「戦争はやってはいけない。始まったら生きては戻れない」と戦争の恐ろしさを聴講者に語りかけた。

続いて、大塚名誉教授の専門分野である古墳調査に話題は移り、同氏がこれまで携わってきた登呂遺跡や綿貫観音山古墳等の調査について解説がなされた。特に、同氏の虎塚古墳での石室絵画の発見は「まさか自分がこういったものを発見するとは思わなかった。本当にラッキーだった」と臨場感たっぷりに語

られた。

大塚名誉教授が調査をするうえで意識してきたのは「古墳を作った当時の人達が何を考へながら古墳を作ったのか」ということ。古墳自体の研究は進んでいるが、被葬者を作った人々との関係論は実に迫った理解に至っていない。同氏は、「後世の研究者にも、そういった古墳時代の人々の気持ちを明らかにして欲しい」と話した。

最後に土屋学長から天皇陵調査の見通しについて聞かれると、大塚名誉教授は「宮内庁の許可が出ても、国民の感情論があるので簡単には学術調査はできないと思うが、もし許可が出た場合は手を挙げたい」と熱く語り、会場は大いに盛り上がった。

### ★明治大学博物館

「素晴らしき古墳との出会い

#### 大塚初重スケッチ絵画展」

考古学者・大塚初重氏が一九八六年から四半世紀にわたって描きつづけた、六百六十五点にのぼる全国各地の古墳のスケッチの中から、約三十点を紹介します。調査や見学の折に、限られたわずかな時間で描かれた古墳の姿は、写真とはまた違った研究者の視点を教えてくれます。また、これらの作品の多くは生涯学習講座の一般市民と古墳を見学に訪れた際に生み出されたものでした。「大塚教室」

の生徒とともに歩んだ、大塚氏の生涯教育の道のりをたどります。

主催：明治大学博物館

協力：大塚初重名誉教授

入場料：無料

会期：五月十一日（土）～六月十六日（日）

会期中無休

会場：明治大学博物館 特別展示室（駿河台

キャンパス・アカデミーコモン地階）

### ●「折紙工学」をベビー用の紙おむつの

吸収体に応用

萩原特任教授がユニ・チャームと共同開発

研究・知財戦略機構の萩原一郎特任教授はこのほど、ユニ・チャーム(株)と共同で、平面の紙を立体的に表現する「折紙工学」を応用してフィットを高めたベビー用の紙おむつの研究を行い、赤ちゃんのからだに合わせた変形する吸収体を共同開発した。

研究の背景は、低月齢期特有の「ゆるうち」が紙おむつの隙間やズレによって、モレが多く発生している状況にある。こうしたモレを低減するため、ユニ・チャーム(株)は今回、萩原特任教授らが研究する「折紙工学」に着目し、赤ちゃんのからだに合わせた紙おむつの形状に焦点をあて、共同研究・開発を行った。

研究では、赤ちゃんのドールを用いて、胴

回りと股間周辺を3Dスキャンし、得られた立体データをパーツに展開。特に「複数のパーツで構成される股間部分」に注力して分析した結果、股間部分に「身体の内側に向かって（複雑な）凸形状が密集」していること、お腹側に「一つの凸状の頂点ができる」ことが発見された。

今回は、萩原特任教授らが構築した世界初の折紙設計システムを使用。足を伸ばした時の写真画像から得られる三次元データをもとに、前部、後部、脚部、下部と四つに構造分離された股間部の展開図を得ることができた。

この成果は、二〇一九年四月二十五日から全国で発売された『ムーニーエアフィット』『ナチュラルムーニー』の改良に応用されている。

### ●OB社長

▽(株)翔葉Ⅱ 大黒勇一郎氏（一九八六年法学部

卒・五十七歳）

▽KYB(株) 大野雅生氏（一九七九年商学部

卒・六十二歳）

### ●ウズベキスタン大使が来訪

今後の連携に意欲

明治大学は四月八日、ウズベキスタン共和国のファジロフ・ガイラト駐日大使の訪問を

受け、土屋恵一郎学長、小室輝久国際教育センター長（法学部准教授）、明治大学評議員で日本ウズベキスタン・シルクロード財団顧問の向井眞一氏らが、駿河台キャンパス・リバイタワー二十三階の貴賓室で意見交換を行った。

ファジロフ大使は、今回の訪問に謝辞を述べた上で、ウズベキスタン国内で高等教育を望む学生が約七十万人いるのに対し、国内の大学に約七万人しか進学できない現状を紹介し「日本の教育機関、人材育成への評価は高い。さらに連携を図り、留学を支援していきたい」と交流を活発化させたい意向を示した。これを受けて土屋学長は「ウズベキスタンからこれまでに受け入れた留学生は十四人と多くはないが、これを機に交流を深化させ、双方の特質を生かした連携をしていきたい」と意気込みを語った。

懇談には、ウズベキスタンから明治大学に留学中のクドラトフ・シヨフルベクさん（経営学研究科博士前期課程2年）、ラスロヴァ・タチアナさん（文学研究科博士前期課程1年）の学生二人も同席。ファジロフ大使と自らの研究分野や将来について意見を交換するなど和やかな雰囲気の中で行われた。

### ●明治大学ELM比較法研究所

#### 国際シンポジウム

医事法と生命倫理に関する資料を専門に扱う資料館・明治大学ELMと法学部比較法研究所は三月二十一日、国際シンポジウム「医薬品・医療機器をめぐる日独諸制度の比較」を駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。

本シンポジウムは、近年のビッグデータやAIなどの技術展開に伴い、医薬品開発・医療機器開発のスタイルが大きな変革を遂げようとする中、日本とドイツの両国間における法制度・法状況を多角的に比較することで異同・長所を明らかにし、将来に備えて考察しようとするもの。

当日は、ELM館長の村上一博法学部長の開会あいさつ、ELM運営委員長の小西知世法学部准教授の企画説明に続いてシンポジウムがスタート。第一部では「医薬品・医療機器に関する制度概要」について、アウクスブルク大学のウルリッヒ・M・ガスナー教授と小西准教授が講演。第二部では「医薬品の規制をめぐる制度」をテーマに、MERCK KGAAのエルマー・ヘルナー氏と日本製薬工業協会医薬品評価委員会副委員長（塩野義製薬株）の花輪正明氏が登壇し、薬事制度の現状や課題について解説した。

第三部の「総合討論」では「安全」をコンセプトに、厚生労働省政策参与の武田俊彦氏をはじめ、第二部までに講演した日独の研究

者・実務家が登壇。医薬品・医療機器の世界で生じつつあるパラダイムシフトにどのように対応していくかについて鋭い議論が展開された。

### ●「臨床心理士」「公認心理師」

#### 合格祝賀会を開催

二〇一八年度の臨床心理士資格試験の結果がこのほど発表され、明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻臨床心理学専修二〇一七年度修了者十人全員が合格し、二年連続合格率一〇〇%という快挙となった。これにより、これまで明治大学から受験した一〇五人全員が臨床心理士資格を取得した。

加えて、二〇一八年度は心理職として待望の国家資格となる「公認心理師」の第一回試験が行われ、これまでの同専修出身者八十九人が受験、八十六人が合格（合格率九七割）。臨床心理士・公認心理師の両資格を持つ高度専門職として医療機関や教育相談所のカウンセラー、スクールカウンセラーとして活躍することになった。

この結果を受けて三月二日には、合格祝賀会を駿河台キャンパス・グローバルラウンジで開催した。土屋恵一郎学長、合田正文学部長、石川幹人大学院院長、野田学文学研究科長をはじめ大学関係者、OB・OGによって組織される明治大学臨床心理士会会員、大学

院生が列席し、合格者を祝した。

祝辞で土屋学長は「臨床心理学専修や心理臨床センター、明治大学臨床心理士会が発展していくことにより、明治大学を支えていってほしい」と激励。明治大学臨床心理士会の三好真人会長は「明治大学で質の高い教育を受けたことを誇りに、一緒に研鑽を積んでいこう」とエールを送った。

### ●自動運転社会総合研究所が

#### 対馬市と連携協定を締結

#### 自動運転の実装化など共同研究を推進

明治大学自動運転社会総合研究所と長崎県対馬市は三月二十一日、地域の持続的な発展に向けた共同研究事業等に関する連携協定を締結した。同日、調印式が駿河台キャンパスで執り行われ、土屋恵一郎学長（研究・知財戦略機構長）と比田勝尚喜対馬市長が協定書に署名をした。

島内唯一の公共交通機関であるバス事業における人材不足、林業振興や漂着ゴミ回収等の環境対策等が課題となっている対馬市。今回の協定締結では、自動運転社会の実現による地域の持続的発展に寄与すべく、法律・技術・保険・地域創生・社会実装化の部門で横断的・学際的な研究を進めている自動運転社会総合研究所とともに、さまざまな課題の解決に向けて共同研究を推進していくこととなる。

る。今春以降には、対馬市における自動運転バスの実証実験も計画されている。

協定締結にあたって、比田勝市長は「生活路線の確保やその他の課題にも大きく寄与し、人口減少が進む島にとっても大きな変化をもたらしてくれる」と述べ、土屋学長は「対馬が抱える課題をどう解決していくか、社会的な公共財としての大学の役割をしっかりと果たしていきたい」と意気込みを語った。

### ●リバティアカデミー春期開講オープン講座

#### 「元号からみる日本の歴史」を開催

明治大学の生涯学習機関・リバティアカデミーは四月十三日、二〇一九年度春期開講オープン講座「元号からみる日本の歴史」を駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催した。新元号「令和」の発表から間もない時期となった講座開催に受講生の関心も高く、七百人を超える受講生を迎えての開催となった。

この講座は、日本の歴史を「古代」「中世」「近現代」の三期に分け、三人の講師が時代ごとに「元号」の持つ意味を解説するもの。

第一部では吉村武彦名誉教授が「女帝の世紀の年号と祥瑞」と題し、「令和」の典故となった万葉集の一節にも触れながら、古代日本では「祥瑞」と呼ばれる吉事をきっかけに改元が行われた歴史を紹介。続く第二部で

は、清水克行商学部教授が「中世の人々にとっての元号」をテーマに、政権のアップルや災害発生などの理由で頻繁に改元されていた中世日本の元号観を説明。第三部では山田朗文学部教授が「近現代における元号」をテーマに、「一世二元」制が導入された明治以降の元号誕生の経緯を解説した。

第四部として行われた三人の講師によるディスカッションでは、司会を務めた山田教授が「明治時代が長く続いたことで、元号が時間の尺度としての意味も持つようになり、庶民の間にも浸透した」とまとめ、講座は閉幕。平成から令和への改元が注目された時期に、元号について理解を深める機会となった。

### ●女性のためのスマートキャリアプログラム

#### 二〇一九年度春期六十六人が入校

リバティアカデミーは四月六日、履修証明プログラム「女性のためのスマートキャリアプログラム」の二〇一九年度春期六十六人（昼間コース九期生三十六人、夜間・土曜主コース八期生三十人）の入校式を、駿河台キャンパス・グローバルホールで挙行了した。

入校式には、竹本田持副学長（社会連携担当、農学部教授）、矢ヶ崎淳子社会連携副機構長（法学部教授）、大友純リバティアカデミー長（商学部教授）をはじめプログラムを担当する講師陣が登場。それぞれが祝辞を述

べ、受講生を歓迎した。

続いて、ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス(株)取締役人事総務本部長の島田由香氏による記念講演が「Work × Life = Career」と題して行われた。同社の働き方改革を主導する島田氏は、受講生に対し自分の選択に自信を持つことの大切さを投げかけながら、ポジティブ心理学や幸福学の観点から、自らを表現し、強みを発揮することの重要性を解説。さらに、仕事の捉え方について問いかけた上で「私たちは自分を変えることができず、自分の人生や命の使い方にも意識を向けてほしい。その先に自分のキャリアがついてくる」と締めくくった。

本プログラムは、女性の仕事復帰・キャリアアップを支援する半期集中プログラムとして二〇一五年に開講。これまでに三百人以上の修了生を輩出している。

### ●スポーツ表彰式

#### 十四団体、六十九人を表彰

二〇一八年度のスポーツ表彰式が三月二十五日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで行われ、優秀賞・敢闘賞・特別表彰を合わせて十四団体、六十九人が表彰を受けた。

これは、国内外の大会で優勝するなど、スポーツ活動で顕著な成績を残した体育会の団体・個人を表彰するもの。

式には受賞者のほか、体育会会長を務める土屋恵一郎学長ら法人役員・大学役職者や、体育会各部の部長・監督などが列席。あいさつに立った土屋学長は一年間の活躍をたたえた上で「競技成績のみならず、日々の生活においても明治大学の体育会の名に恥じない行動を」と激励し、表彰状を授与した。

受賞者を代表して謝辞に立った射撃部の劉炫慈さん(商4)は、四年間を振り返りながら「どんな困難にも自分自身を見失わず、前への精神と明治大学で学んだという誇りを胸に後輩の良き模範になりたい」と決意を語った。

### ●硬式野球部

#### 「内海・島岡ボールパーク」第一球場人工芝が全面リニューアル

体育会硬式野球部の合宿所兼練習場である「内海・島岡ボールパーク」第一球場の芝が、全面人工芝にリニューアルされ、このことを記念した完成式典が三月十日に開催された。

式典には、大学役職者やボールパークの所在する府中市の高野律雄市長と、二〇〇六年まで硬式野球部の合宿所があった調布市の長友貴樹市長が出席。野球部OBや、父母、未来サポーター募金の寄付者らが見守る中、井上崇通硬式野球部長のあいさつで開式した。

土屋恵一郎学長、柳谷孝理理事長、長友調布

市長、高野府中市長の祝辞に続いて、駿台倶楽部の土井淳会長より、硬式野球部へ募金の贈呈が行われた。閉式のあいさつに立った善波達也監督は、日ごろの応援や大学関係者への謝辞を述べた上で「素晴らしい施設で日々研鑽を重ねて、新しい野球部の歴史を刻んでいきたい」と力強く意気込んだ。

式典に続いて、國學院大学とのオープンニングゲームが行われた。土屋学長、柳谷理事長による始球式では、長友・高野両市長がバッターボックスに立ち、スタンドから大きな拍手が送られた。

### ●ラグビー部

#### 東日本大学セブンズ三連覇

体育会ラグビー部は四月十四日、秩父宮ラグビー場で開催された七人制ラグビー「第二十回東日本大学セブンズラグビーフットボール大会」で見事優勝を果たし、三連覇を達成した。

「関東大学対抗戦A」と「関東大学リーグ戦1部」を戦う東日本地区の十六大学によるトーナメント方式で催された同大会。一回戦は中央大学に48-0、続いて流通経済大学に36-12、準決勝では帝京大学に12-10で競り勝ち、決勝に進出した。決勝では東海大学に25-5で勝利し、三年連続の優勝を決めた。

今年1月の全国大学ラグビーフットボール

選手権大会で二十二年ぶり十三回目の大学日本一に輝いた明大ラグビー部。今シーズンもさらなる活躍に期待がかかる。

### ◆駿台トピックス

#### ●長堀特別顧問に記念品を授与



このたびフランス共和国政府の芸術文化勲章シユヴァリエ（騎士）を受章された長堀特別顧問に、田村会長から記念品が授与されました。心よりお祝い申し上げます。

### ◆退会会員

（平成三十年四月～三十一年三月）  
阿部了、新井久晴（故人）、石原道勝、庵原宏章（故人）、小川弘毅、小國博明、笠井正弘、河合秀二郎、神田金栄、木下重次郎、須貝栄、鈴木紀行、高橋博文、長谷川嘉昭、松江康司、宗近博邦、横村武宣（故人）、米山明広

### ◆三月例会出席者

青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、坪昭二、

浅井宏、同ご同伴、安達明正、有賀隆治、飯田和人、池田一義、池田勝也、石川かおり、石橋良一、泉山和久、市川治彦、同ご友人、伊東正博、井上欽也（代理）、伊原敏雄、上西紘治、潮田伊佐夫、宇田川雄弘、内川雄一郎、浦川竜哉、大野正美、大橋重男、大原幸男、大前実之、大村託現、大屋政則、鬼塚和也、小山哲郎、加賀美猛、同ご友人、狩野省市、栢森靖、河合陽一郎、河村博、神林光、木村健一、清野明男、國井泰成、小島清治、五味道雄、小山修、小山有彦、根田哲雄、根田吉雄、三枝富博（代理）、坂田貞夫、笹田学、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、志田憲彦、柴田清之、鈴木紘一、鈴木隆志、同ご友人、関孝夫、同令夫人、関根均、瀬戸正道、高澤徹、同ご同伴、高見克司、武田宣夫、田村駿、辻井知明、天童美德、同ご友人、当山明彦、富井征也、同ご友人、富水流孝二、中川敏洋、中里猛志、長堀守弘、中村康一、中村豊、二井康夫、西澤豊、同ご友人、西山武夫、二宮充子、根岸伸明、野口昌宏、萩原裕次、長谷川進一、同ご友人、畠中君代、同ご友人、埜英幸、馬場範夫、林威樹、日高憲三、深代尚夫、福田和彦、福見勉、前川一郎、榎野泰、摩尼和夫、宮入知喜、向井眞一、村岡健、室井恵明、柳谷孝、山上雅隆、山口政廣、山田憲典、山田朝彦、山田勝、山端康幸、弓野理恵、渡邊一治、渡邊洋三

### 【編集後記】

長年親しんだ年号である「平成」が「令和」に代わりました最初の会報になります。「昭和」から「平成」に代わりました時は、数年前から体調を崩されていた昭和天皇の崩御というニュースを聞き、家族と沈んだ気持ちで「平成」を迎えようとしたのをよく覚えています。しかしこのたびは生前退位ということで、メディアの報道の華やかさも相まって、明るく「令和」を迎えることができたように感じます。寒暖の差が激しい日が続いておりますが、会員の皆様におかれましてはお変わりございませんでしょうか？

明治大学は今年も八千三百八十八名の新入生が入学し、キャンパスにも活気が出ている時期かと思えます。新入生には日本のみならず世界で活躍する人材になってほしいと願うばかりです。

先日、ベトナム・ハノイに行きまして、現地の学生と接する機会を得ることができました。彼らの実家にも訪問しましたが、決して裕福な家庭ではなく、家の前の道は舗装されておらず、レンガを積んだ三階建ての家でした。しかし学生たちは大変素直で勤勉、何より強い意識の高さ、好奇心の高さに驚かされました。日本に対する強い憧れと、貧しさから脱却したいという熱意に脱帽したのですが、同時に私たちがもしつかり熱意をもって仕事に当たらねばならないという想いを強くしました。「一念岩をも通す」と申しますが、日本人のアイデンティティを守りつつ、強い信念をもって、グローバル化した現代を生き抜いていきたいと思っています。

最後になりましたが、このところ寒暖の差が激しい日々が続いております。どうぞお体をこ自愛いただき、またお目にかかりますことを楽しみにいたしております。

（相臺 志浩）